

東南アジア群島部の陶磁器消費者

The Ceramic Consumers in the Southeast Asian Archipelagoes

坂井 隆

- ① 論究問題・研究史・方法
- ② パンテン遺跡群出土例の器種分類
- ③ 前期陶磁貿易での遺跡資料（9～16世紀前半頃）
- ④ 後期陶磁貿易での遺跡資料（16世紀後半～18世紀頃）
- ⑤ 用途から見た消費者
- ⑥ 文献に記された消費者
- ⑦ まとめ

【論文要旨】

世界史的な陶磁貿易の構造解明に向けて、本論では東南アジア群島部における陶磁器消費者の実態像について、各地の考古資料より接近を試みた。具体的な使用者を探る手掛かりとして食膳具・調度具・貯蔵具に区分することで各遺跡出土品の内容を検討し、またこの地域の特徴を示す重要な製品であるクンディ型水注とアンピン壺のあり方を考えた。

前期（9～16世紀前半）16例と後期（16世紀後半～18世紀）6例について分析を行った。これらは港市・政治拠点・寺院群・墓地及び航路要衝・沈没船に区分できるが、陶磁器使用者は支配層・祭祀神官・富裕階層・中間層住民・下層住民に分けて考えられる。

港市や政治拠点の陶磁器の少なからぬ部分は、遠距離地へ再輸出や近距離地へ搬出される。また港市ごとの陶磁器のあり方は、政治的な支配関係よりも主要貿易ルートとの関係に依存している。

寺院群では、クンディ型水注のような儀礼器種や特注タイルのような荘厳財が多く見られる。だがそれらは特定宗教の個有品ではなく、群島部に在来する信仰観念から生まれたものである。また東部では大量の陶磁器を埋納した集団墓が発見されているが、これは葬送儀礼に関するものと考えられる。これらの墓地の被葬者社会は、主要貿易が生み出す二次貿易に関係している可能性がある。

群島部はアジア海上貿易の重要な結節点に位置するため、さまざまな流通業の発達が早くからあった。そのため、陶磁器使用者として大きな役割を持っていたのが流通業を主な生業とする中間層住民である。彼らは流通商品以外に、一定度の自己消費分も所有していた。

群島部では彼らの役割が大きく、王権も流通業と深く関わっていた。そのため貯蔵具の転用も含め陶磁器の使用は多量多岐にわたり、また二次貿易の発達もあって流通価値が高まったと思われる。